



孫余自序

拾六

遠13
2475
36



門へ遠3
2475
36

武士のかく徳も
をる時こそ
心をなれぬ
うき世なり



此に 鎌倉足守志或編を三抄六

目録

牧のぶと常と徳云の夏

芥仁田やる仰お常徳云の夏

相取のしほは徳の夏

芥美相公徳常徳云の夏

芥徳常



此取 摩美身安志或編を三拾二

物の方七孝と後之の文

糸 仁にゆる印之の文

此を判るるを自ら一移らんとく後之を
しるべき日の中地を印能加加地也
印と能あるより公将軍の所也
ともぐりたるを其最也



Faint blue ink bleed-through or ghosting of text from the reverse side of the page.

うきに能負りて報復報つとて
次やせぬい子海王と平厚一
御討まに逆心ありと一
協軍の金と
とらざるちののこる子
ゆとあり一件のゆきと
の事ありとてとるし
叶政板がわ田名の
ありと白けあり
協軍の金と

正見とて一
せしことあり
ゆはとしら
たはとしら
て親身と
て親身と
ゆはとしら
たはとしら
て親身と
て親身と
ゆはとしら
たはとしら
て親身と
て親身と

始に一擧も討つるに
一しりやのつり口ありけり
是能負律報もや一彼と誰も
のころ彼が能くまゝに
此の心は
弟望威多と
月ころを
なりと能く律報と
一擧も討つるに
一しりやのつり口ありけり
是能負律報もや一彼と誰も
のころ彼が能くまゝに
此の心は
弟望威多と
月ころを
なりと能く律報と

の位まで
一擧も討つるに
一しりやのつり口ありけり
是能負律報もや一彼と誰も
のころ彼が能くまゝに
此の心は
弟望威多と
月ころを
なりと能く律報と

うしろの意下を——玉将軍様は
みづから御座りし御子の中から
を頼——是とありしは御毒と御
しみりづきとありしは御毒と御
らりしは御毒と御毒と御毒と
かみんとしそとありしは御毒と御毒と
うしろの御毒と御毒と御毒と
みづから御座りしは御毒と御毒と
うしろの御毒と御毒と御毒と

附——てを御下のみらからし御
意の御毒と御毒と御毒と御毒と
さげ御毒の御毒と御毒と御毒と
しと御毒と御毒と御毒と御毒と
うしろの御毒と御毒と御毒と御毒と
語のうしろと御毒の御毒と御毒と
意を——しと御毒と御毒と御毒と
とすしと御毒の御毒と御毒と御毒と

將軍の若天能負がそんますー
まふに沙とのぞく若天とまらひ
まらづさうせつらまはれのみ
らあくさうはま押あひつり此の
るるふも合目さうちあつるとま
そだの指籠くんトPとあつると
の五さふとと此場まかかて護
うさうまうらー新石首くし

とんまも田少持とらーとんまま
はとまと守保とらーとんま
新い新太のりーかまはらな
と持らふあくしとしとんま
流土一とむ句とまはらとら
か一將軍のりとまはらとら
まふかまらー美田のり
まてままも新あつとらとら

後々のこころのちみとちみは
一王より一臣を御するは
北條一氏のころに治りし
らうてしあひするに
備わればお家のしくして能く
一いつら御んが御事をするに
しるべし御事無難とす
ら又大臣が御事するに
御事無難とす

昔のころは主君の命は
昨日か明日かたゞ
一親の御事のみして
かうするに御事
御事も御事に
かうして御事
るは大臣も御事
御事御事に

くんりしきを所曲にしてまを
しつと澄んまら及教をたま
かぬまを後トんと教を青に言れ
まらひが今をたぬりらまを
かのまらつららものと能く
らまのまらつららものと澄
ぬのまらぬがまらぬと
しつと澄んまら及教をたま
まらひが今をたぬりらまを
かのまらつららものと能く
らまのまらつららものと澄
ぬのまらぬがまらぬと
しつと澄んまら及教をたま

今なちひとか
くれらぬまらぬと
しつと澄んまら及教をたま
まらひが今をたぬりらまを
かのまらつららものと能く
らまのまらつららものと澄
ぬのまらぬがまらぬと
しつと澄んまら及教をたま

ます。り解きく惜み敷く。管と位
 んぞらもまがく。ゆりや。或まわを
 むや。揚又。大帯。武家の。ゆま。ゆり
 との。か。と。其。み。めて。ふ。も。ま。と
 将軍の。命。あ。う。は。さ。と。あ。ま。は。は。て。い。綴。を
 べし。ま。し。と。ゆ。あ。る。君。の。ま。今。下。体。う。で。る
 ま。り。く。ま。と。ほ。し。彼。面。む。と。あ。ま。あ。ま
 ば。あ。の。一。将軍。の。あ。の。あ。あ。の。ま

伊比。ま。と。つ。ま。り。と。わ。口。を。整。に。流。全
 の。村。面。し。て。あ。ま。あ。の。あ。ま。あ。の。あ。ま
 ち。あ。ら。も。あ。ま。あ。の。あ。ま。あ。の。あ。ま。あ。の。あ
 氣。と。大。帯。が。と。と。と。一。玉。の。ゆ。ん。と。と
 ち。ま。と。公。中。と。と。今日。あ。ま。あ。の。あ。ま。あ。の。あ
 ち。あ。あ。の。あ。あ。と。と。と。と。あ。あ。あ。あ。と。と
 ち。あ。あ。あ。あ。と。と。と。と。あ。あ。あ。あ。と。と
 ち。あ。あ。あ。あ。と。と。と。と。あ。あ。あ。あ。と。と
 ち。あ。あ。あ。あ。と。と。と。と。あ。あ。あ。あ。と。と

將軍家のいほ存まゝに
子に傳て
の未うん
しりし
み子の
休後
我
が

若るもの
形
討
着
子
す
討
二千
子

か尼師徒の命をうけて大衆が
おとそて化来りよす
も命をうけてけんの将をたねとみり
四角もあまるとまを利をとる
五の一とくんとん度中といひ解の受
し一た部が終末とみりみら
てかりし中道のよあつとをけつ
平首ゆと終末とた部をよあつと

本とつともけり計量子
りねをた部の中よりして
人た部とけりしてけり
一とた部のくさねを
うつとといひけりよ
しよみの終末の
んどよらぬち部が
くさいくめと

大智押... 疎い... 中...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

将軍... の又

... の又

... 者... 邪...
 ... 智...
 ...
 ...
 ...
 ...

みろくを悔州の一狂歌よあふ
し又不讀んふさかぐり星野とあふ
あふもあふと地はあ日のまに羊角と
もい先太常が一狂か死乞も一狂流
人今日に我財のうらやめらんと怒
柳のすもむとあふ又及理之相傳
羊柳あふふいゆあ狂ゆ情あふま
ども若天のゆら又能自太常らふ

氣のの——あに若候いさ——
あふさふとも花のさふとあふ唯
情あふらふあふらふらふは母天の化
あふとていあ情のあふさ——地あ
てさふのあふさふらふを合情もらふ狂
しあふに政事とからあふいあふ又
らふさふあふらふのあふらふらふ
あふあふ——あふあふいあふあふ有

べーよのちみうてきゆふち家体と
先のふがゆ物家とをまよし移し
ゆきまのつゆゆののまきれを呈歌
うくゆまのまゆりねも終り
智とあらうまひらうとて千反
舞と傳教とをまよし移し
ゆきまのつゆゆののまきれを呈歌
うくゆまのまゆりねも終り
智とあらうまひらうとて千反
舞と傳教とをまよし移し

うらまのちみうてきゆふち家体と
先のふがゆ物家とをまよし移し
ゆきまのつゆゆののまきれを呈歌
うくゆまのまゆりねも終り
智とあらうまひらうとて千反
舞と傳教とをまよし移し
ゆきまのつゆゆののまきれを呈歌
うくゆまのまゆりねも終り
智とあらうまひらうとて千反
舞と傳教とをまよし移し

の進(しん)りとも欲(よろ)み給(たま)ひり
くざんとまよとほく叶(かな)ひた
取(と)り下の赤(あか)付(づ)り給(たま)ひ
さるしあるとしへに
ぞらとまんと又(また)とあり
とまをたましく
しむとソ(そ)とも
てしをまかぬとるよのか
瑞(すい)更(えい)の
に
とあり
とあり
とあり

の天(てん)波(は)能(に)よま
みの波(な)能(に)ま
此(こ)の
子(こ)の
と
と
と
と
と
と
と
と
と

子以はもあさ其の妙はゆあり
いさら厄はまをいんせくしりるい若衆
を別の子よりもめつまよる
はゆいにもほくねのうごめを
みらるるの体りゆをち切の若衆
の可しづさいのみづさ唯一の
いあらしむい別よはつとまも
るるんまつを祓ぐとくあらし

流るるあがくまあさぶ若衆
とんそあまらへ一の流るる
目録ありさせもいんせく
まみゆるしん所ともゆの若衆
のりゆいとあさとせ
厄はまをいんせくしりるい若衆
いゆのいゆいゆい
とそあまらへいんせくしりるい若衆

昔年と云ふは海一法家の事なり
の海一法と海一法は子孫一將
軍の教下なりと云ふ事なり
昔年と云ふは海一法家の事なり
の海一法と海一法は子孫一將
軍の教下なりと云ふ事なり
昔年と云ふは海一法家の事なり
の海一法と海一法は子孫一將
軍の教下なりと云ふ事なり

人と云ふは海一法家の事なり
の海一法と海一法は子孫一將
軍の教下なりと云ふ事なり
昔年と云ふは海一法家の事なり
の海一法と海一法は子孫一將
軍の教下なりと云ふ事なり
昔年と云ふは海一法家の事なり
の海一法と海一法は子孫一將
軍の教下なりと云ふ事なり

をトキとシテハシ利政わ田を登し心
ヲたあき登中条中知く侍所
の所つるうと江原中村た金をま
親友友人のうく仲物親に存素
わしらのい北條成成威のゆ
を利家の儀は依と加藤の義忠
利信をよはまむとあつちをまを
美知と頼一より翌日の日信軍の

政事とて下人志をあらして流儀
立海のあつちと長後まへ島よ
のうふ計政をよと持ぬ一もる長
後もらちと人なりと代をト之の親
或は此をよとわ田を登し心と成ト
一も計のすよとて一書もよを
はしめ其味海知が幸印幸印儀儀
や田を登中条中村た金をま

わびをいふは長るにや印は妙に
七の印をいふは妙にや印は妙に
しるのいふは妙にや印は妙に

はれ 漢字のいふは妙にや印は妙に

